

# 野とあきとれ

第1号

発行 あきる野市教育委員会 東京都あきる野市二宮350 電話 0425-58-1111 FAX 0425-50-3451

## あきる野市名の由来

あきる野市文化財保護審議会委員

石井 道郎



阿伎留神社  
あきる地名の起源  
とみられる

### 1. よみがえる古地名

秋川市・五日市町の合併は新市の名称が課題の一つになっていたが、誕生した「あきる野市」は、かな文字効果もあって、ソフトな印象を与え、好評裡に受け入れられているように見える。

「あきる」は秋川・五日市両地区が共有する古地名で、「あきる地名」の採用は味のある選択であった。

以下、親子の対話によって、当地方の古地名を分かりやすく説明する。

秋子 五日市のおばさんは五日市の名が消えるのが惜しいと言っていたわ。

父 五日市は戦国時代末期に発生した地名で、現在まで400余年の歴史をもち、一頃は西多摩南部を代表する町

だったからね。

秋子 私は秋川市という名前好きよ。爽やかで、若々しく、未来一ぱいというイメージ。

父 住民が自分の地区の名に愛着を持つのは当然のことだ。しかし合併は、いってみれば結婚で、これから一体になって新しい歴史を創造する。だから新市名を名乗るのが筋の通った行き方だと思うよ。

秋子 「あきる野市」は古地名というけれど、何となくモダンな感じがするわ。

父 古地名が新しい装いをした甦り、時代を先取りした面もある。

秋子 でも「あきる」については、正直何も知らない。

父 そこで「あきる地名」の起源、使用された時代、地域等について、先輩の研究などを参考に、まとめて話をしよう。

## 2. 小川郷と秋留郷

秋子 「あきる」地名はいつごろから使われたの。

父 秋留郷という郷名の初見は鎌倉時代初期（後述）のようだが、平安時代後期には使われていたと思われる。説明の順序として、この地方の最古の地名「小川郷」から話を始めよう。

日本の地方制度の発足は奈良時代（8世紀）に定められた律令制度による。それは全国を国・郡・郷に分ける。武蔵の国は大国だから21の郡を置き、その中の多摩郡には10の郷を置いた。【和名抄】という古代の事典に多摩郡の郷名が出ているが、トップに小川郷が記載され秋留郷はない。小川郷は地理的には秋川・平井川の全流域を含むが、実質的には両川の下流域で、そこには官営牧場「小川の牧」もあり、後に武蔵二宮となる小川明神社という古社もあって、当地方の先進地であった。

秋子 どのくらいの人が入居していたの。

父 設定時の郷制は郷里制とも言い、一里は50戸、当時の一戸は大世帯で20～30人を越えることもある。一郷一里とすれば500人以上となるが、どの時点をとるかによって違う。詳細は不明だね。いずれにせよ400年に及ぶ平安時代、関東は専ら開拓時代で、人口は自然増の他、西国方面からの流入も見られたようだ。開拓のリーダーは武力を備えた土豪たちで、彼らは未開墾地域を含む広大な地域を占拠したから、土地をめぐる争いは絶えなかった。

秋子 西部劇の世界ね。

父 歴史に名高い武蔵七党は血縁によって結ばれた武士の集団で、実態は開拓農場主のチェングループだ。武蔵七党の一つ西党の出身者が小川地区に勢力を張り、郷名をとり小川氏を名乗った。またその分家が二宮氏を称し二宮神社領を管理した。更に同じ西党出身と見なされている小宮氏が平井川下流域を占拠した。後発の開拓者は小川地区ではこの三者のいずれかに従属しなければならない。従って、自然条件は厳しいが、夢を求めて秋川の中・上流域に入り込んだ開拓農民もいたに違いない。

秋子 秋川・平井川流域も平安時代の初めと終りとは住民の数も、開拓地の拡がり具合も違うわけね。

父 自分たちが切り開いた土地は所有のあかしとして自分たちで地名をつける。新しい郷名も生まれる。

秋子 公的な小川郷の中に勝手な郷があちこち生まれた。

父 お父さんは秋留郷という郷名は発生当初は秋川中流域を指すと考えている。理由の一つは、江戸時代の三内

村はもと秋留本郷と称した（『新編武蔵風土記稿』）。

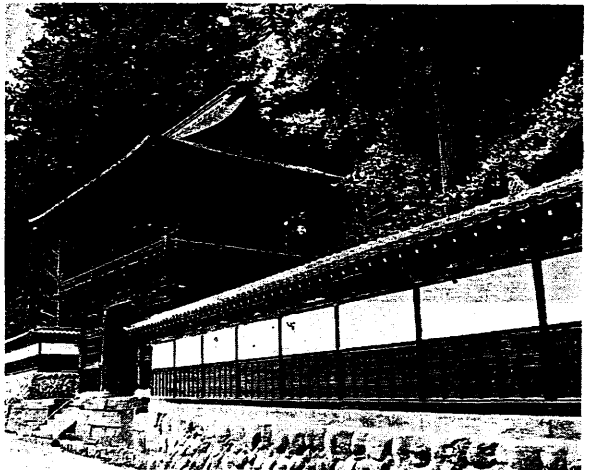
本郷は発生地とか中心地の意味だ。

その三内村の隣村横沢に、鎌倉時代の冒頭、建久2年（1191）平山季重が大悲願寺を創建した。彼はつづいて16年後の建永2年（1207）檜原村小沢に宝蔵寺を建てたが、これには、「秋留の橘郷開発祈願のため（橘郷＝檜原地区）」という記録（『大悲願寺過去帳』の注記）が残っている。この注記から、秋留地名が鎌倉時代初期に使われていたこと、季重が大悲願寺を秋川中流域、宝蔵寺を上流域の開発拠点にしたことが推定できる。

平山季重は頼朝の御家人で源平合戦に戦功を立てた人物だから、幕府から開発許可をもらったのだろう。平山氏も西党出身で日野に本拠をもつ。彼が同族で、同じ頼朝御家人の小川・二宮氏らとの競合をさげ、秋川中上流域を開拓の地と定めたのは当然で、この地区には鎌倉幕府の権威をバックに乗り込んだ平山氏に対抗できる有力者はいない。平山氏の割り込みは一応成果をあげたようだ。

秋子 戦国時代末期の檜原城主は、平山氏でしたね。

父 平山伊賀守氏重、後裔だろうね。



大悲願寺 秋留郷開発祈願の記録が残る

## 3. 小川氏の衰亡と小川郷の消滅

父 鎌倉の御家人となった小川氏らは北条時代に入っても承久の乱（1221）に戦功を立て、小川・小宮氏は西国・九州に所領をもらっている。ところが鎌倉時代末期、小川・二宮の両氏が史上から姿を消し、二宮神社領も没収されてしまった（『秋川市史』）。

秋子 北条氏が滅びた時（1333）、一緒に滅びたの。

父 その前の北条・三浦合戦の時、三浦氏に殉じたという説もあるが詳細は不明だ。とにかく主のいなくなった

小川地区では郷名もすっかり影が薄くなった。

秋川・平井川流域には南北朝・室町期（14・15世紀）にかけ、在地の武士たちが武州南一揆という地縁結社をつくり、活発な行動を開始している。

秋子 どんな行動。

父 世は動乱期だから、関東公方（足利氏）や関東管領（上杉氏）の要請をうけ出陣するんだ。勝ち戦なら恩賞が貰える。幸い北条氏滅亡の際も勢力を保ち得た小宮氏などが南一揆の統領株だが、戸倉や北伊奈地区にも武士系住民が育ってきた。五日市地区の有力寺院はみなこの時期に創建されているが、地侍たちの力の充実が感じられる。秋川中流域の在地武士の成長が、地名秋留郷の拡大につながり、下流域まで呑み込んだというのがお父さんの推測なんだ。

#### 4. 秋留地名の語源と阿伎留神社

秋子 秋留郷の発生と郷名の拡大はわかったわ。ところで肝心の「あきる」とは一体どこから出た言葉でどういう意味をもつかしら。

父 「あきる」という地名は難解だね。「武蔵名勝図会」の檜原村の項には、秋川はもと「阿伎留川」と称したという伝承を伝えている。色々な人が色々な解釈を下すが、どうやら五日市の古社阿伎留神社にかかわる地名とされている。そうすると、阿伎留神社の社名は何かということになる。

秋子 阿伎留神社の歴史は古いんでしょ。

父 勅撰六国史の一つ『日本三代実録』に「元慶8年（884）7月15日武蔵国正五位上・勲六等畔切神社に従四位下を授く」という記事がある。社伝によれば阿伎留神社はもと畔切神社と書いたが、10世紀編さんの延喜式卷九（神名帳）に阿伎留神社と記載されたので、以来阿伎留の文字を使用しているという。

秋子 阿伎留という文字は意味がなく、音だけ使った万葉仮名ね。

父 そういうことだ。秋川市発行『秋川地名考』の中で、著者保坂芳春さんは神社の旧名「畔切」の文字をとりあげ、畔切りは切断＝破壊ではなく、畔を切りひろく＝開拓の意味だとしている（五日市町史は切断説）。祭神味耜高彥根命は出雲系の農耕神だから「あきる」＝開拓説は祭神と符合する。保坂さんは「あきる」をアキ・ルではなく、ア・キルと読むべきだと主張している。一方埼玉大学の原島礼二先生は阿伎留神社は新羅系渡来人キシ集団がこの地に入った時、自分たちの信奉する新羅の女

神アカル姫を祀ったものとしている。「あきる」＝アカル姫説だね。たしかに五日市には岸・木住野姓は多いし、阿伎留神社は今も境内に韓国出身の五十猛命を祀っている。

秋子 驚いたわ。わたしなど、どっちがどっちとも判断のつかないお話。でも両方とも阿伎留神社を開拓者集団の守り神としているわね。

父 ついでに言うと、日本神話ではアカル姫は和名下照姫で、味耜高彥根命の妹に当り、この兄弟の父が有名な大国主命だそう。この話はこの程度で打切るが、阿伎留神社が早くから位や勲等を貰い、さらに神名帳に記載されている（式内社という）のは、この神社の氏子たちが、何らかの公的な功績があったからで、武蔵国府が多摩川沿いの府中に建設される時、上流から用材を送ったのではないかという研究者がいる。多摩郡の式内社の多くが、多摩川の上流域にあるのがその証拠だとしている。お父さんは小川郷の小川明神社をさしおいて、阿伎留神社が式内社となったのを不思議に思っていたが、国衙や国分寺の建設に功績があったとすれば、合点がゆくね。

#### 5. 郷から村へ — その後の秋留郷

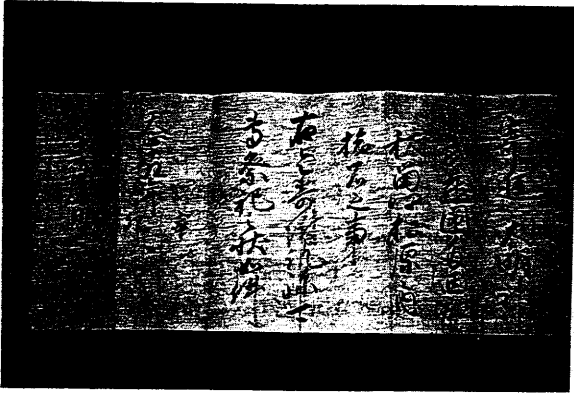
父 古代から中世前期の社会は、規模の大小はあれ、有力な農場主（土豪）が多くの隷属農民を牛馬のように使った社会であったが、中世も半ばすぎると、丸抱えの農民を解き放ち独立の農民とすることによって、農業の生産性を高める時代がやってきた。人々の生活基盤も、郷より規模の小さい村が中心となり、そこで独立農民の自治を主体とする社会生活が営まれはじめた。その終点が江戸時代ということになる。

秋子 秋留郷はどうなったの。

父 村に解体されてしまった。江戸時代末期の文政期（1820年代）に編さんされた『新編武蔵風土記稿』は村単位の地誌だが、各村の書き出しに「もつ〇〇郷に属し」と中世期の郷名を伝えている。こころみに、もと秋留郷に属した村を拾ってみると、旧五日市地区の村16すべて、旧秋川地区は多西地区を除く9ヶ村、それに高月村・檜原村を加えて27ヶ村。秋川の源流から多摩川との合流点までの全流域だ。かつての小川郷と違うのは平井川流域を含まないことだね。

秋子 それじゃ、日の出町と合併する時に困るわね。

父 何もそこまで心配することはない。中世の平井地区（日の出町平井）には「平井郷」、草花地区には「小宮郷」という郷名があったというのが、風土記稿の平井村



秋留郷名のみえる徳川家康発行の朱印状

・草花村の項は「その郷名を失う」とか「その郷名を伝えず」とか、素気ない記述だ。

秋子 秋留郷という地名は生命力旺盛ね。

父 江戸時代になっても秋留郷名が使用された事例がある。

家康は天正18年(1590)7月小田原城を落城させると、8月1日には江戸に入城、翌19年には領国内の寺社に朱印状を公布しているが、その阿伎留神社分は、

「武蔵国多西郡秋留郷松原之内拾石之事一」

大悲願寺分は、

「武蔵国多西郡秋留郷横沢之内式拾石之事一」とある。

朱印状は將軍の代替わりごとに発行され、その文面は原文通りだから、秋留郷は最後の発行者14代將軍家茂まで使われている。

秋子 秋川地区には、東秋留村、西秋留村があったわね。

父 あれは江戸時代以来の小さな村を合併整理させる目的で、明治22年町村制が改正されて誕生した。あの時も古地名の甦り現象があったわけだ。結局、昭和30年の秋多町の出現まで、67年間使われていたが、年輩者にはなつかしい地名だ。「あきる野市」が秋川市民に抵抗感なく受け入れられる素地となったと思うよ。

## 6. おわりに

秋子 「あきる野市」のひらがな文字は、「阿伎留」か「秋留」かで迷ったあげく、窮余の策と聞いたけれどー。父 「阿伎留」は五日市寄り、「秋留」は秋川寄りともいうのかな。いずれにせよかな文字は正解だった。阿伎留神社だって、終始一貫阿伎留ではなく、畔切であったり、秋留を使ったこともある。

秋子 へえ「秋留神社」ともいったの。

父 神社の社室に建武5年(1338)の懸仏の台盤があるが、その陰刻文字に「秋留神社」と刻んである。秋留郷の地侍たちが意気旺んだ時代だ。

ところで、最後に阿伎留神社に幕末の著名な画家渡辺華山が訪れた話をしよう。華山は絵を残しているが、百姓姿の馬子と馬が端にいて、あとは一筆長々と山なみの遠景が描かれている。その画賛は「都より畔切の道は一」という書き出しで、「はるばると野路のあきるにくたびれて、多麻のよこ山横に寝てみん」と歌が添えてある。

秋子 畔切の道ですってー。

父 この絵はいま都内の収集家の手にあり、華山の阿伎留神社滞在を疑問視する人もいるが、畔切の文字が何よりの証拠となる。「畔切」は保坂氏によれば開拓の意だという。私は「あきる野市」という新市名の中に古代の開拓者の精神がうけつがれることを願っている。ただし、物質的な開拓ばかりでなく、精神的な開拓を含むよ。

秋子 どういうこと。

父 日常生活の便益追及＝消費文化の開拓にばかり目を奪われなくて、心の価値開拓に留意してほしい。例えば華山にしても、一流の画家であり、一藩の家老でありながら、時代に先んじた憂国の蘭学者であった為、やむなく自殺の途を選んだ。こういう人間の生涯も、立派な開拓者の途であることを理解できる市民であってほしいということだ。



渡辺華山 多摩の横山図(部分)